The Future We Want.

JAPAN VOICES

シフトを、
日本から。

Preface

2012年、地球サミット2012（リオ+20）がブラジル、リオデジャネイロで開催されます。

10年に1度開催されているこの国連最大の会議は今回で3回目ですが、これまで、大きな成果は出ていません。そこで私たちは、「参加」と「対話」と「行動」をキーワードに、未来へ向けて、どうすれば「持続可能な開発」を実現できるのかをこの地球サミットをきっかけに世界に届けたいと考えています。

持続可能な世界を目指すために、いま舵を切る必要があるとはだれもが感じているでしょう。どうすればいいのでしょうか。

この電子書籍が作られた日本では、2011年3月11日に大きな震災がありました。地震だけでなく、津波や原子力発電所の事故など災害と人災により甚大な被害を受けました。同時に、原子力発電所の事故で、日本は世界に対して放射能をばらまくという加害者にもなりました。

大きな悲しみや怒りが被災地を、そして日本を包みましたが、またそこに世界中からたくさんの祈りが集まりました。悲しみや怒りの中から前を向く人たちも現れました。

一方で「復興バブル」と呼ばれるほど、現在、被災地にはヒト、モノ、カネが吸い込まれています。例えば、カネ。日本政府は復興経費として約18兆円を投じます。これは、岩手、宮城、福島の被災3県の年間予算約7年分です。

自然災害、政府／市民との関係、お金、原発事故、エネルギー問題、そして環境問題。2011年3月11日を経て、日本がいまもなお抱える問題は、世界が抱える問題の縮図でもありました。

例えば、人口問題があります。

2011年、世界人口は70億を超えました。驚くべきことですが、1800年代の世界人口は10億人。その130年後の1930年で倍の20億に。そこから1974年に40億人、1987年には50億人、1999年に60億人に……加速する人口増加、予測では2045年に世界人口は90億人に達すると言われています。1秒ごとにおよそ5人が生まれている計算です。

生活様式も変貌しています。日本では、都市へ人口が集中していますが、世界でもそれは同様で、2008年、人類史上はじめて都市人口が農村人口を上回りました。

人口の増加と、生活様式の変化。急激な変わりように人と地球のバランスが悪くなっていると感じている人は多いのではないでしょうか。

人類の5%が世界のエネルギーの23%を消費しています。

人類の13%がきれいな飲料水を確保できないでいます。

人類の38%が十分な衛生設備を持っていません。

そして、今。

日本に暮らす人の声を集めることで私たちが目指す未来が浮かんできます。

ようやく気づきはじめた新しい未来の姿を失わないように、世界に届けることが人と地球のバランスを崩した経済大国の責務であり、二度の原子爆弾投下と史上最悪の原発事故を経験した日本の役割だと信じています。

編集長　中村祐介

（※人口増加データは日経ナショナル ジオグラフィック社の情報を参考にしました）

contents

Interview 1　地球サミットと日本

Interview 2　アーヴィンラズロ博士

Interview 3　野中ともよ

Interview 4　田中優

Interview 5　中野裕之

Interview 6　広瀬敏通

Interview 7　Voices from Fukushima

Interview 8　熊野英介

Interview 9　Voices of HOPE

「The Future We Want. JAPAN VOICES」は
一般社団法人環境パートナーシップ会議が作成しました。

編集長
中村祐介(株式会社エヌプラス)

編集
西岡舞子

翻訳
森佳美(同志社女子大学)
石井彩菜(同志社女子大学)
大石智奈美
西岡舞子

アートディレクション、デザイン
加藤英一郎
汐月陽一郎(株式会社chocolate.)

プログラム
株式会社エヌプラス

写真
生駒安志
ペータ

協力
地球サミット2012ジャパン、アドビ システムズ 株式会社、東京リスマチック株式会社、一般社団法人ワールドシフトネットワークジャパン

この本は「独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金」の助成を受けて制作されました。

Copyright © Environmental partnership council / Earth Summit 2012 Japan

1

Interview

地球サミットと日本

廣野良吉
Ryokichi Hirono

成蹊大学名誉教授
一般社団法人環境パートナーシップ会議代表理事

東日本大震災は、直接の被害者のみならず、私たち日本人全員、また世界の人々に気候変動による自然災害の規模や頻度の増大と今後起こりうる同様な災害への備えの重要性を認識させました。また、私たちの自然と共生よりも物質的な生活改善を追求した近代の価値観について反省する機会でもあったと思います。

しかし、世界が抱える問題はそれだけではありません。世界は途上国と先進国という対立があります。国連ではどんな会議でも1国1票です。途上国の方が数が多いから途上国の支持する決議が通る状況ですが、それが実行されないことが多い。実行するためには資金と整備も人材も必要です。しかし、途上国だけでは確保できません。この先進国と途上国の利己的な対立がなくならないといけない、と私は考えています。今後はこの対立の構図ではなく、先進国、新興国、後発途上国が共に、自国の経済的、社会的、環境的、文化的持続性の強化のために努力を重ね、互助・共助すべき時代に突入したと言ってよいでしょう。すべての国が一緒になって地球が抱える問題を解決していきましょうということです。

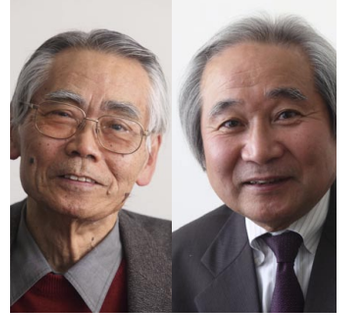
私はいろんなことをやっている人間なんですが、環境をテーマにしたミュージカルを過去10年間で日本全国はもちろん、世界の多くの国々で開いてきました。小学生から大学生を主体にしたメンバーでやっています。このミュージカル、テーマは「青い地球はだれのもの?」というものです。これはみんなに考えてもらいたいことなんですが、誰のものだと思いますか? 自分のものなんです。全員が「自分のもの!」と思えば大切にします。誰かから借りているものではないんです。自分のものそういう風にみんなが考えてくれれば大切にしますね。

青い地球はだれのもの?
自分のものだから大切にできる。 Japan Voice

1

Interview

地球サミットと日本



後藤敏彦
Toshihiko Goto

サステナビリティ日本フォーラム代表理事

世界でいま何をしなければ、ということをみなさんはもう一度考えないといけないと思います。たとえば、最近では日本が京都議定書から抜けると言い出しました。これを受けて、日本の政治家や企業はもう何もしなくていいと考えているようですが、大きな間違いです。約束をしたときの主張はどうしたの? ということなんです。世界的な課題がどこかに飛んでしまっている気がします。3.11は日本にとって大きな出来事でした。でもそれだけじゃないですよね。世界になんらかのメッセージを出すべき出来事だったとは思いますが、世界は日本中心に回っているのではありません。世界的に何が起こっているのか、ちゃんと考えないといけないですよね。

いま、再生可能エネルギーの可能性についての議論が加速化しています。これは本来あった課題の解決への議論を3.11が加速化させたということです。原子力で行くという利権グループが決めた方針がもうダメだとわかったのが今回の原発事故です。私は原子力をすべて止めろともすべて安全だとも言いませんが、きちんと判断しないといけないということです。

もうひとつ、日本が世界に気づきを与えられたとするなら「ポスト競争社会」の話をしなければいけません。震災時に日本では奪い合いや殺し合いではなく助け合いがあった。そしてそれに世界が驚きました。これは実はずいぶん前から言われていたことでした。西洋の考え方では人にはなんらかの制約が必要と言われています。「社会契約論」というものですね。そうでないと秩序が保てない。ですが、日本は違う。強い政府がなくても人々はお互いに協調し合って生きている。日本は文明が出来上がる過程で、南や北など多くの人々が集まりました。そこで日本という国を作るときに、殺し合いでどこかの民族が統一するのではなく、全体としては融合し仲良くすることを選んだ。以前から日本人はそういうことができたんです。今回の災害でそこが改めて世界に伝わった。ポスト競争主義の世界を日本が見せることができた。その意味は大きいと思います。

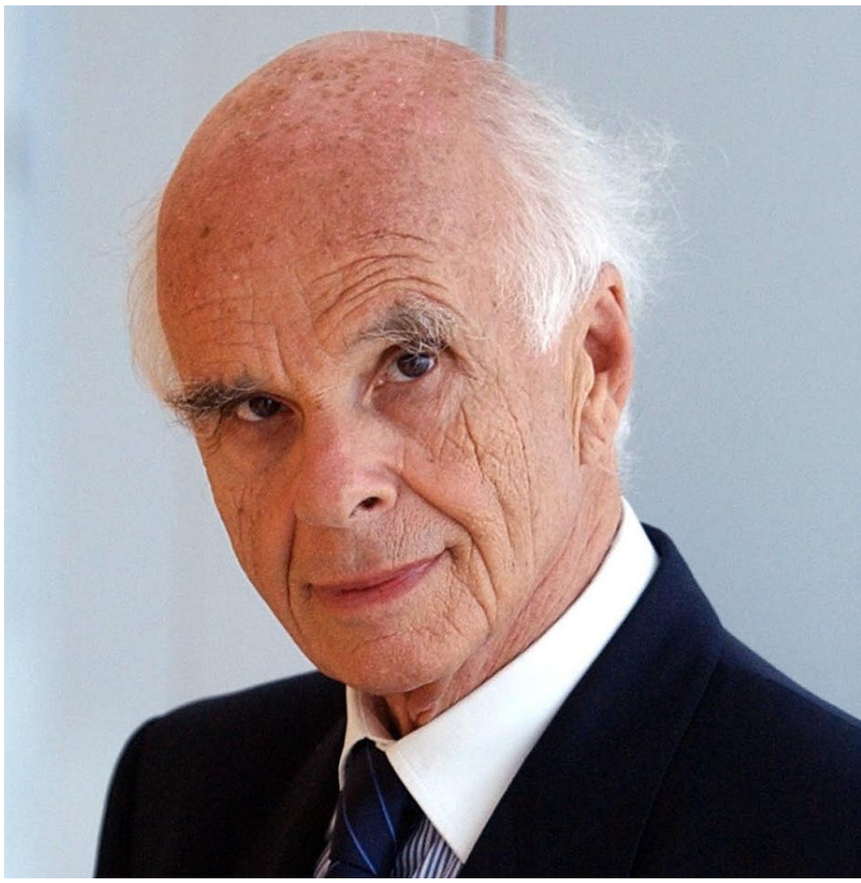
課題の解決へ向けて3.11を経て議論が加速している。

Japan Voice

Interview 2

アーヴィン・ラズロ
Ervin Laszlo

世界賢人会議「ブダペストクラブ」創設者・会長



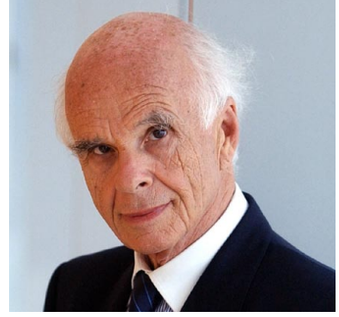
シフトはすでに始まっている。 Japan Voice

2012年末には何か劇的なことが起こると、より多くの人々が確信しているようだ。そう、劇的な何かは確かに起きるだろう。そしてそれは劇的に良いことかもしれない。たとえ世界がいきなりパラダイスに変貌しなくとも、我々はその方向に向かうためのプロセスに取り組み始められるのだ。何故ならば、2012年末はある時代から次の新たなる時代へ移り変わるときだからだ。しかしどんな時代へ移行してゆくのかは、まだ決まっていない。唯一わかっているのは、20世紀にやり続けてきたことが、じきに後戻りはできない地点に到達するということ…。それがどんな未来につながる道だとしても事実、引き返せなくなる。2011年春、現在。我々はその転換点に辿り着こうとしている。

古き体制からの脱却はすでに始まっているが、それが果たしてブレイクダウンになるのか、あるいはブレイクスルーになるのかは定かでない。現行のシステムを今後も維持できると信じ、政治や経済の現状にしがみついている一部の人々によって、まだ転換点を迎えていないからである。そうした人々はビジネス、金融、政治を旧体制のままに留めようとし、決してそれが無益な行為だとは認めようとしない。彼らの努力は転換点の到来を遅ら

Interview 2

アーヴィン・ラズロ
Ervin Laszlo



せられたとしても、回避にはならない。それよりも賢い選択は、現行のシステムを越えて、自分自身や他人、そして自然と平和に共存する方法を見つけることだ。これは至って現実的な選択である。我々にはテクノロジーも、資金も、ノウハウもある。問題はそれに伴う意志があるかどうかだ。

我々に必要なのは新しい考え方だ。アインシュタインが述べたように、問題が起きたときと同じ思考のままでは、真の問題解決はできない。もし我々が作り上げてきた世界がもはや通用しなくなってきているのだとしたら、生活と文明のため新たなパラダイムにシフトしなければならない。ここに至るまでと同じ考え方のままでは、我々は向上ではなく、下降に向かって大きく踏み出すことになる。

我々が作り上げてきた世界が持続可能でないことはとっくに知れているはずだ。1962年、レイチェル・カーソンが将来を見据えた著書【Silent Spring】の中で、我々が環境に対して行っている行為はこの先も続けられるものではなく、やがてしっぺ返しがくると述べている。1972年にはローマクラブが、生態系のパラメータだけでなく、社会的・経済的な世界モデルをはじき出した【成長の限界】を出版した。大改革を行わないかぎり、世界のシステムは百年以内に崩壊するであろうと予測している。今日、この非持続可能な状態は広く認識されているにも関わらず、限界点を向かえるまで、あと百年も猶予がないことに気付いている人は多くない。

我々は危機的な時代に生きている。複数の危機は多様でありながら、基本的には同じ理由に起因している。地球上で行われてきた末期的な管理・運営の過ちを深刻且つ能動的に変えてゆこうとする姿勢の欠落だ。

エコロジーにおける非持続可能生について。今のような水や海洋資源の使い方、土地の管理をこの先もずっと続けるわけにはいかない。人口増加に伴う、一人当たりの消費増加は、地球の貴重な資源を急速に枯渇させている。空気の汚染についても同様に持続可能とは云えない。特に都市部や産業地帯で近い将来、深刻な健康被害をもたらすだろう。

経済もまた持続可能ではない。生産·流通の技術の大きな進歩にもかかわらず、貧富の差はどんどん広がっている。市場や利益を求めるあまり、主流のビジネスは人々の欲求を大量消費で満たし、次々と天然資源を貪っては、資源生産のピークと減少を引き起こしている。現行の世界の金融システムは全く理不尽なものだが、銀行家や政治家は未だそれを維持しようとしている。

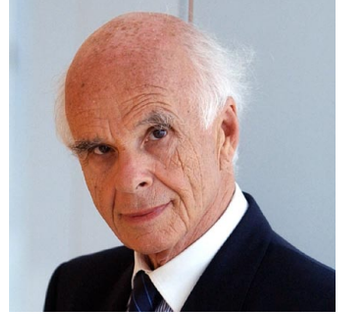
不平等と不正、グローバルな情報流出にさらされ、燃料を巡る憎しみあいと反乱によって、先進国および途上国の両方で 社会構造は崩壊しつつある。独裁者とパワーエリートを打倒するための草の根運動はアフリカを席巻し、アジアとラテンアメリカにも広がっている。社会的、政治的なホットスポットや環境が脅かされているところから、比較的落ち着いた、実りある地域へと大勢の人たちが押し寄せている。結果、社会にストレスを与え、経済と環境に過度の負荷をかけることになる。

我々が生み出す非持続可能生に加えて、自然もまた独自で激変する。日本の海岸沖地震が示したように、それは社会とテクノロジーの崩壊を引き寄せ、非常に大きな

Interview

2

アーヴィン・ラズロ
Ervin Laszlo



混乱と被害を拡大させることがある。

しかし危機的な世界に住んでいても、ポジティヴな面もある。古くから「悪い出来事中にも何かしらいい部分はある」という考え方があるが、我々は忘れてしまっている…危機は危険であると同時にチャンスでもあるということを。危険性はもはやハッキリしている。また同時にチャンスも見えてきた。「グリーンエコノミー」は先見の明のある起業家たちに、資源生産と利用における無駄と危険を減らす方法にシフトすることによって得る新しい成長のしかたを提供している。予測不可能な変動により、今日の不安定かつ不公正な金融システムを変えたいと願う人たちが増えている。さらなる金儲けをするためだけでのお金ではなく、生命と健康を向上させるための金融システムを求めている。日本の原発事故が引き金となって、この本質的に危険なテクノロジーに基づいた暮らしに未来があるのかどうか、世界中で論争がおきた。一体、「核の未来」とは撞着語法なのか。我々はすでに光子の流れを電子に変換させて、風、水、そして植物や潮の力を活用できる 方法を知っている。それなのに電力を作るために、我々は本当に核分裂によって、あの古めかしいタービンを回すための蒸気を発生させる必要があるのか。

危険は現実にそこまで迫ってきている。猶予はない。しかし幸いなことに、本当にチェンジする機会も増している。ビジネス、メディア、さらには政治にまでも、代替案を探索する気運が高まっている。クリーンテクノロジーやグリーン製品への投資は急上昇。ヨーロッパのほか、ラテンアメリカ、そして抑圧によって反乱に至ったアラブ諸国では、社会やエコロジーに対する意識の高い選挙人たちが台頭している。これは個人、そして社会全体が現状から離れ、新しい道に踏み出そうしている兆候だ。ワールドシフトは始まっている。

芽吹きだしたワールドシフトを意識的に推し進め、未来を選び取るということは、我々の世代に許された最大最高のチャンスだろう。そうしたチャンスを掴み、この地球上で人類の未来を確かなものにできるかは、我々次第なのだ。

協力 ブダペストクラブ ジャパン

Interview 3

野中ともよ
Tomoyo Nonaka

NHK、テレビ東京等で番組キャスターとして活躍後、日興フィナンシャル・インテリジェンス理事長、アサヒビール、三ツ井不動産など企業の取締役や経営顧問を歴任。2002 年6月より三洋電機 取締役、2005年7 月～2007 年3月同社代表取締役会長。また、科学技術庁顧問、財務省、文部科学省など政府審議会委員や、日本体育協会理事、太陽光発電協会代表、産業技術総合研究所、JAXA などの経営諮問委員を務める。2007年8月NPO法人ガイア・イニシアティブ設立、代表を務める。

まじめに笑いましょうよ、
より多く笑うことで幸せになれるから。 Japan Voice

—— The Future We Want

よりよい未来を築いていくのは、世界を変えないといけないと思います。

どんなにGDPが膨らんでも、私たち日本人の所得が増えても、幸せな社会ではないということを今回の震災と原発事故で学びました。

いっしょに学びましょう。

日本にはみんなと一緒に考えることができる文化があります。

「おたがいさま」「もったいない」「使い捨てない」それをみんなと一緒になって考えていける魂を持っていると思います。

自分を超えた大きなものに感謝する文化が日本にあります。

この文化はとても大事です。

水にも風にも大地にも神様がいる。

そういう考えが日本にはあります。

水や風、大地の声を一緒に聞いてみましょう。

電気が必要…だったらお日様から、風から、海からもらいましょう。

Interview 3

野中ともよ
Tomoyo Nonaka

そこに日本が貢献できると思います。

地球をよりよいものにするためには地球を、価値観をShiftしなければいけない。人生の価値の軸を「お金のめもり」から「いのちのめもり」に変えて物事を考えていこう。「いのちのためにはお金が必要なんです」って言う人もいるでしょう。でも3.11のあと気がつきましたよね。どれだけお金を持っていても命がなくなればお金はただの紙切れです。どんなにお金をかけても命は1度しかないんです。命を縮める働き方はもうやめましょうよ。「食っていく」というのは「生活力」。生活をする力は金を稼ぐ力だと思っていませんか? 生活力というのはいのちの力です。それが生きる活力です。それがなくなったら、どんな経済大国でも関係ありません。
早く目覚めましょう。よりよい未来を作りましょう。命が喜ぶ世界を作りましょう。

—— 最優先で取り組むこと

「環境問題」という言葉があります。よく「僕、環境問題ぜんぜん興味ないんですよ」とかいう人がいます。その人たちにとって環境問題は自分の外側にある単語。まるで「政策提言」とか「教育問題」みたいに。でも本当は「環境問題」は自分の中にある問題なんです。生きていくための問題なんですよ。最優先で必要なこと、それは「自分に気づくこと」。自分の命、自分はどこからきて、誰から命をもらって、このおしまいがある時間をいただいている、ということ。なんとなく永遠に続くものと考えてしまうから、環境問題が人ごとになっている。この地球にこのいのちをもらった自分は何もの? と深く気づきを持つことで、すべての問題にぴっと解決の道が見えるんです。
「はたらく」という言葉の意味を考えてみましょう。働くというのは「端を楽にしてあげる」ということ。私が小さなころにおばあちゃんから言われていたこと。「何をしてあげれば自分が役にたつのだろう?」小さなころから住み込みのお手伝いさんがいたけれども、例えば玄関のお掃除を学校に行く前にする。してあげることで、家の前を通る人がどれだけ気持ちよくお勤めにいけるか。働くことでほめてもらうんじゃないんです。お金がいくらだから仕事をする、って考えたことがないんです。それが「はたらく」ということなんです。
「自分に気がつく」ということ「自分がどういう時間を過ごすか」ということ。他人に評価されるために仕事や学校を選ぶのではありません。そういう刷り込みから自由になりなさい。命は一回なんだから、やりたいことやりなさい。いい仲間を見つけなさい。そのためには「端に楽をさせられるように」、役に立つ自分になりなさい。そういう労働を考えてほしいなといつも思っています。まじめに笑いましょうよ、より多く笑うことで幸せになれるから。

4

Interview

田中 優

Yu Tanaka

未来バンク事業組合理事長

一番幸せだったときを思い出してください。 Japan Voice

—— The Future We Want

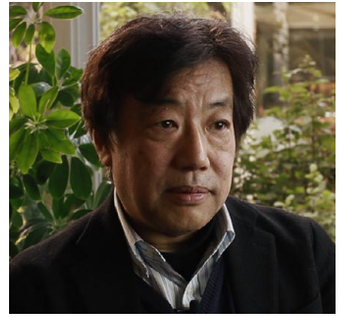
戦争がなくなって、平和な社会になり、人々はお金中心の社会からお金で買えないものが中心になっている社会になっていてほしいです。そして、各地域はエネルギーを自給し、自分たちですべてのものが自給できる社会になってほしいです。

世界中の戦争や紛争の原因はお金儲けです。奪い合うもの石油などエネルギーです。それを一部の人が独占している。利益の分配が上から下へいく。その中で人々は生きてきた。それを逆さまにすることが可能ではないか？エネルギーに関しては消費量のきわめて少ないものがあちこちにあらわれてきた。それを使えば電気の消費量を少なくすることができる。少ない消費量になれば自然エネルギーから生み出すことが可能になる。自然エネルギーにシフトする鍵は消費量を少なくすること。これが技術的に可能になってきました。

戦争したい人はエネルギー源を握るためにしていたけれど、自分でエネルギーを生産して「エネルギー源なんて必要ないよ」と言える社会。それが大切だと思いま

4 Interview

田中 優
Yu Tanaka



す。

日本では大きな地震が起こって、原子力発電所がチェルノブイリ以上の放射能をまき散らす事態を生みました。脱原発も必要だけど、従来型の社会とは別の社会を作らないといけないという意識が日本の中で出てきました。従来のようにどこか大きなものにぶら下がっていれば社会は安泰に動くという考えが「そうではなかった。自分が社会に関わっていかなければいけない」という考えて変わってきていると思います。

自分のセキュリティーは自分で守るという時代に入らなければいけないと思っている人が多いと思います。どうするんだ? と迷っているところだと思います。従来はお金が源泉だったのですが、そうではない、自然や食物とか我々のエネルギーを支えているものに振り返ると太陽だった。太陽はどこにでも降り注ぐのでその太陽を使ってエネルギーを作ると多くの人が感じ始めてると思います。

金に頼る社会をやめて、自然エネルギーを自分たちで作ってそれを送電線につないで……さらに電気が自然エネルギーからだと高く買ってもらえる、という仕組みができたらみんな地域で自然エネルギーを生み出すと思う。ヨーロッパでは新設発電所の60%が自然エネルギーです。ドイツの例をみると、自然エネルギーの発電所は雇用者数が従来型に比べて12倍も多いんです。

いま、日本人が自分の足で立つことが必要だと思います。一番幸せだったときのことを思い出してください。それは決してお金ではないですよね?

Interview 5

中野裕之
Horoyuki Nakano

映画監督・映像作家・映像プロデューサー・シネマトグラファー。GLAY、Mr.Children、サザンオールスターズ、布袋寅泰、DREAMS COME TRUEほか多数のアーティストのミュージッククリップを手がける。映画「SF サムライ・フィクション」(1998年)で映画監督デビュー。CM、自然の映像、ドキュメンタリーなど、その映像の種類は多岐にわたる。

他国の樹木を伐るのをやめる。 Japan Voice

他国の樹を切らない世界にしたい。樹木を切ることで、その国の環境を破壊し、思い出や大切なものを奪うことになります。日本は多くの国で樹木を伐っています。これをやめたい。日本には多くの森林があるのに他国の森林を伐るのは価格が安井という利由から。しばらくは高くつくでしょう。でも他国の樹を伐らないことで日本の林業が復活します。すると価格も落ち着くはず。人や地球に迷惑をかけることをやめる。このことが、世の中を変えることにつながります。

例えば原子力発電は多くの人に迷惑をかけます。廃棄物の処理も迷惑をかけます。化学的な石油を使った洗剤などを海に流すことも迷惑をかけます。これらをやめれば、どうですか? よりよい世の中になると思いませんか? 代替えになる商品や方法はすでにあります。だからそれをみんなで支援すれば世界が変わるのです。

樹木などの植物は太陽の力で光合成を行い、二酸化炭素を吸収し、酸素を放出します。これと似た機能が人間にはついています。心臓から送られてきた二酸化炭素を酸素と交換する肺です。人間が吸い込む酸素は、エネルギーとして使われ、肺から二酸化炭素として排出されます。つまり樹木を伐るということは、地球の肺を無くす

Interview 5

中野裕之
Horoyuki Nakano

ということなんです。

樹木を伐ると未来はありません。樹木をはじめとする植物は話すことができないので、人間が好きなようにする。でも、これから50年先、100年先を考えたとき、年金とか、いろいろな問題はあるかもしれないけれども、樹木を伐るとそもそも人間も動物も生きていくことができなくなる。何年ももたないのです。

お金が欲しいからという人間のエゴで、止めるべきことを止めない。ちょっと先の幸せをお金で得ようとするのではなく、自分たちや子どもたちのこと、世界のことを考えて、今すぐ樹を伐るのを止めなくてはいけない。

― 3.11を経て

2011年3月11日の東日本大震災で、断続的・継続的な停電が起きました。原子力発電所が停止したことによる、電力不足ということで東京電力は言っていますが……。ただ、その停電の時、自分は電気がなければ、ただの人だということを痛感しました。

私が使っているビデオカメラも、パソコンも電気がないと動かない。映像を撮ることができない。本当に役立たずなんだと気づいてしまった。自分の足下がふらつく気がして、エネルギーについて猛勉強しました。

そして、映像を撮る人間として、もう一つ恥じたことは、何でもない町並みが一瞬にして消え去るのに、その町並みをなんでもないという理由で撮ってこなかった自分自身。今でも後悔しています。

「なんで俺は、東北の映像をもっと撮ってこなかったのか」

「なんで俺は普通の町並みを撮ってこなかったのか」

もうその“普通の町並み”は、多くの人の思い出の中にだけにある状態です。

映像は、思い出を時間に記録することだと考えていた私にとって、これは本当に残念なことです。

こうした絶望の中で、“マスコミ”というメディアがいかに信用できないのか、ということがわかったことは、大きな学び、教訓でした。これは他の多くの人も感じたのではないでしょうか。

マスコミというメディアは、結局、お金で動くメディアであって、広告主に都合の悪いことは言わない、一企業でしかないということが、あらためてわかってしまった。

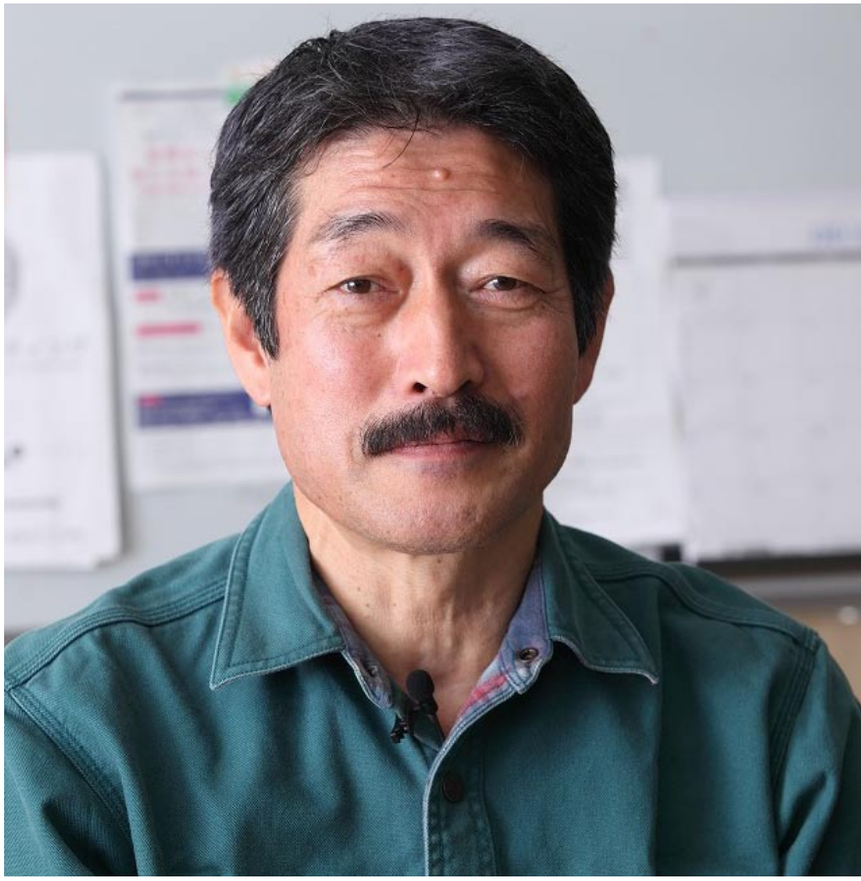
この狭い日本という国土の中で、東日本大震災・原発事故のために、住めなくなる場所がある。誰もがわかる状況下、「原発は怖くない」「原発は必要」とテレビ番組が言う。本当に間違っていると思います。そういう発言をしている企業のものは、買っちゃいけないんです。「原発怖いんです。でもないと生活できないんです。どうしよう」って泣いてる方がまだいい。堂々と原発推進している人は間違っています。これは日本に限らず、世界中で言えることです。

実際に原発事故は世界を恐怖に陥れている。それがわかっていないというのがおそろしい。まき散らされた放射能物質があり、日本は世界に迷惑をかけている加害者だという認識を持たなければいけない。日本も含めて、世界がチェルノブイリや福島から何も学べないというのは、おかしいと思います。

Interview 6

広瀬敏通
Toshimichi Hirose

NPO法人日本エコツーリズムセンター代表理事
RQ市民災害救援センター総本部長
ホールアース自然学校創設者・会長
阪神・淡路大震災(1995)、新潟県中越地震(2004)、スマトラ沖地震(2004)、岩手・宮城内陸地震(2008)など、災害救援ではこれまでに長年の活動実績がある。 東日本大震災(2011)では発生2日後に現地に入りRQ市民災害救援センターを立ち上げ、現在も支援を継続中。さらに被災地からの学びを教育の機会とする一般社団RQ災害教育センターの代表を務める。



お金が社会を回しているという考えから離れる時期。 Japan Voice

—— The Future We Want

一人一人の個人がしっかりと生きる社会を望みます。強いリーダーを求めるということはしたくありません。

日本の戦後は何の文化ももたない、経済的な機能しか持っていないと思われています。でも、私たちはしっかりと分厚い自然界に裏打ちされたDNAを持っている。それは自然と一緒に生きるという気持ち。「お互い様」で生きて行くという認識。お金とは関係ない人とのかかわり合い。それが完成した社会。生きて行く幸せを楽しめる、そういう文明を日本から発信したいです。

— 3.11を経て

私は震災直後に緊急支援を行うために、被災地に入りました。当時は大変な混乱がありました。1995年に発生した阪神・淡路大震災の際に被災地に入りましたが、今回はまったく状況が違いました。津波により街そのものがなくなっている地域もあり、そこでは支援をしたくても私たちが拠点とする場所もなかったのです。今までの経験がそのまま活かせないとわかり戸惑いました。その中でも、手際よく、短時間に役割分担をすることが自分の最初の役割でした。

Interview 6

広瀬敏通
Toshimichi Hirose

こう話すと混乱が悪いように聞こえますが、混乱は悪いことではありません。混乱しているからこそ、多少の無理ができる。これを「災害ユートピア」と呼びますが、そんな時だからこそ、多くの人が抵抗感なく様々なことを受け入れることができ、「よしやろう」と物事がスムーズに進むと思います。

また、災害は恐ろしいものですが、災害によって得られる恵みもあります。日本人はそれを古代から知っています。火山が起こることによって、その火山灰が何年も立つとミネラル豊かな土壌になる。土砂崩れが美しい景観の湖を作ることもある。いろんな恵みを災害から得てきたのが日本人。日本人というのは、世界と比べてきわめてポジティブな要素を持っているのではないかとさえ思います。いま置かれた状況を受け入れ、失ったものは諦めて前に歩き出そうとする。これは政府が号令をかけてできることではありません。今回の3.11でも津波で家族を失った人が「前に行くんだ」「街を作り直すんだ」と言っています。

ただ、冒頭申し上げ通り、今回の震災は阪神・淡路大震災とはまったく異なりました。神戸という都市部で起こったのが同震災ですが、2011年3月11日起きた東日本大震災は震災に加えて津波の甚大な被害と原発事故があります。特に津波の被害が被災者の感情に顕著に表れていました。というのも、波の届かなかった隣の家は無事なのに自分の家は流されているという被害が実際に起きたからです。それによって、相手を妬んだり自分を卑下したり……複雑な感情が生まれ、地域社会が崩壊しつつあります。津波は、街だけではなく今までそこにあったコミュニティすら破壊したのです。

最優先でやること

日本はもともと農村国家だったのに、都市に住む人が田舎に住む人を超えてしまった。それではいけないと思います。これは日本だけの現象ではありません。

世界が共通して起こしている、都市に人が集中するという現象。都市で経済が発展している。でも、本当は都市じゃない地方に多くの人が暮らしてそこで文化を花開かせていた。それこそが文化の多様性で大切なこと。これをもう一度取り戻すことが大事です。

都市にいま人が集まる理由はお金が都市で回っているからです。つまり、お金で自分の人生をはかろうとしている。でもそろそろ、お金が社会を回しているという考えから離れる時期じゃないでしょうか。

Interview 7

Voices from Fukushima

桜井勝延
Katsunobu Sakurai

南相馬市市長

3.11

去年の3月11日に地震が起きて、大津波がきて、南相馬では41km² が破壊された。631名が死亡し、現在でも7人行方不明です(2012年3月取材時)。さらに、そのうちの87名は遺体が見つかったのではなく、家族が死亡届を出し、死亡ということになっています。いなくなった家族を探すことができませんでした。その理由には原発事故です。地震だけでも大変ですが、今回原発事故も起こったということで、家族の捜索さえもできない。

今回の震災で一時的に自分の町を出た人は25万人いると言われていますが、そのうち4人に1人は南相馬市の市民です。これはあまり知られていません。さらに、少しずつ復興している中、いま自分の町に戻れていないのは原発の避難民だけという状態になっています。これをみんなが考える必要がある。

来年度予算では南相馬の予算の1.5倍の予算、400億が警戒区域外の除染だけで使われます。繰り返しますが、除染だけです。そしてこれだけ莫大な予算をかけても、除染は追いつかないでしょう。原発事故はそういうひどいことを引き起こします。私が「脱原発」というのは当然のことでしょう。いつになったら原発事故は収束するのかわからないのです。国は収束だなんて言っていますが、南相馬市でそんな言葉をつかったら袋だたきにあいますよ。

いま、南相馬市にいる人は不安だらけです。町にいる人も安心して生活してるわけではない。見通しが立たないし。こんなことを二度と引き起こしてはならない。

原発再開しないと日本の産業がダメになるという人がいます。しかしそれは、原発事故が起こったことでどれだけの産業が破壊されたのか、理解していないとしか思えない。原発をやめて、新しいエネルギーに挑戦していく、それが新しい市場を作っていくこともできます。ひとたび、放射能がばらまかれると、人間やすべての生命体が被害をうける。こういうことを二度と起こしてはいけない。

—3.11を通して、日本へ、そして世界へ

この1年の経験は世界的にも歴史的な経験。これをわれ

原発事故の経験から、
新たな知恵を持った地球人へ。
ひとたび放射能がばらまかれると、
人間やすべての生命体が被害を受ける。

Japan Voice

Interview 7

Voices from Fukushima

われが伝えて、発信していくことが世界に対してメッセージになる。地球を少しでも貴重な長い時間を維持できるということになると思う。地球はこのめずらしい星は宇宙の中の奇跡なんだから、そこに生きている我々がそれを自覚しないと。ぜひこの我々の生活から新たな知恵をもった地球人になってほしいなと思います。

佐藤健太
Kenta Sato

福島会議事務局長／負げねど飯館常任理事

福島は混沌としています。県内でも風評被害や、放射能の被害、津波の被害の大きさが違います。つまり、福島の中でも分断が起こっているということです。だから私は福島会議としてみんなで話をする場、そしてその声を発信する場を作ろうと思いました。

原発問題は「明日は我が身である」ということだと思います。原発は福島にだけあるわけではありません。日本でも、世界中でもどこにでもふりかかる可能性があると思います。住民たちがつながり合い、会話をして「これはどうなんだろう」と話し合うという必要があると思います。原発を作るのなら、それが何か一人一人理解できて納得できないといけないと思います。100%安全であると理解しないといけないです。

私は飯館村出身です。ふるさとにあった生活がなくなってしまいました。私が作ってきた友人関係はなくなりました。自由に暮らせていたものができなくなり、精神的な問題が大きくありました。

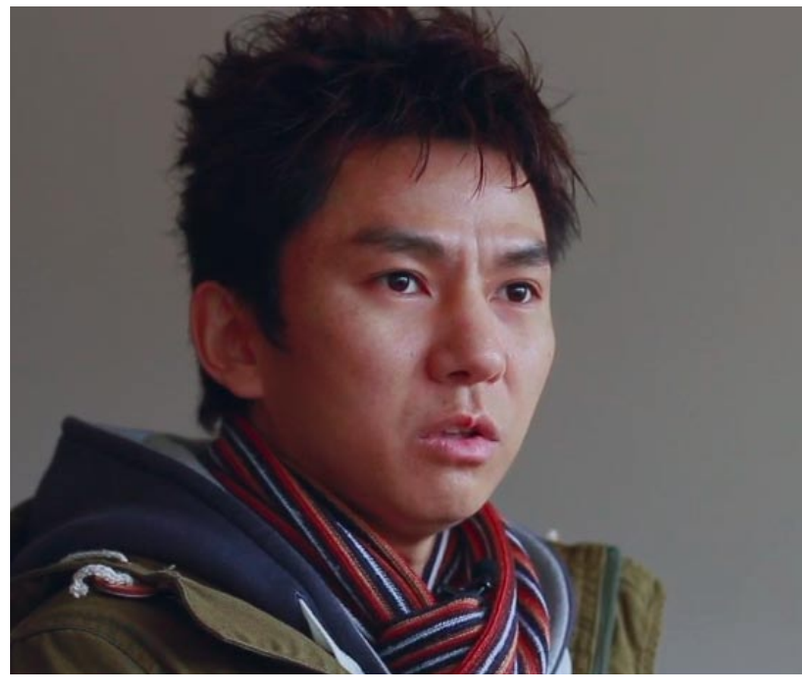
私が生まれたときにはすでに、原発がありました。もう稼働していて事故が起こったらなんて教えてもらったこともありませんでした。年配の原発反対をしていた人たちは事故が起こって「ほらみろ!」と言いますが、私たち若い世代にとっては事故が起こったことで不安や憤りの方が怒りより大きかったです。

もう起きてしまった事故なので、ここからどうしていく、ということを考えていかないといけないと思います。

> 原発は福島にだけ
> あるわけではありません。 Japan Voice

Interview 7

Voices from Fukushima



須藤英治
Eiji Sudo

「つながろう南相馬」代表

震災が起こって、原発の問題がありました。私たちはすべてを失ってしまって、当初は気持ちの整理ができなかった。支えてくれる人に「ありがとう」と考える前に「今どうしていこう」という目の前のことしか考えられなかった。
それが、いまは「自分たちで何かをしなければいけない」と感じるようになりました。

脱原発という声を上げるのではなく「町をどうするか」。この状況に向き合って、これからどうしていくかを考えるしかないんです。被害のない地域や放射線汚染がない地域だと、原発に対して「反対」と言えるかもしれない。だけど私たちはもう、放射能で汚染されているこの地域を受け入れないといけない。その町に住んでいるんです。医療も学校も何もかも崩壊したこの町で生きて行かないと行けない。そこで新しい生活をしようとしているということがニュースになるという状態。これがもう「脱原発」という声なのかもしれないですね。
「どうして地元の人は声を上げないんですか?」と聞かれることがあります。けれど、ここで生活しているということそれだけがもう身体を張って声をあげているということなんです。

今は、自分たちがこの町を愛している理由はなんだろう、ということを一生懸命考えているという状態なのかもしれません。原発問題は「脱原発」とか「反原発」ということを言うだけじゃなく、文明そのものに「これで大丈夫なのか」と考えるという問題なのではないでしょうか。

人はどう生きて行くか? それを考えて変えて行く。何もなくなったからこそ新しく生きて行かないといけないんだと思います。政府からの保障など与えられることばかり考えるのとは違います。なにか、新しい時代を感じて、そこに何ができるか考えて進んで行く、そこにいるのが被災地だと思います。いまは新しいものを生み出すときなのかなと思います。

**頼ること、待つことをやめて
自分たちから
行動しなければいけない。** Japan Voice

近藤能行（南相馬市よつば保育園副園長）

「基準は子どもにあわせよう」

放射線の線量についてやはり、保護者は心配します。明確なガイドラインというのもよくわからないなかで、子どもに健康被害があるんじゃないか? という心配がどうしてもあります。子ども目線の厳しさでいろいろなことが決まっていくといいと思います。

VOICES from Fukushima

高村美春（「花と希望を育てる会」代表）

「傷つけあうことはもうやめよう」

福島で子どもと生活をしていこうと決めたときに、自分のエゴに気がつきました。国が見捨てた場所を、そのふるさとを今度は私が捨てようとしたときに、ここで暮らしていきたいと強く思いました。生き残っていくためには私の子どもを守らなければいけない。そのために活動しなくてはいけないと思いました。エゴだと思われればそれでもいいんです。震災後、私はたくさん傷つきました。それは外からの人によってではなく、同じように福島で生活する人たちから傷つけられました。傷つけ合って心の安定を保とうとしているんですが、それはとても悲しいことです。そんなことはもうやめようと言いたいです。

丸森あや（市民放射能測定所理事長）

「未来を守りたい」

震災から行政は安心、安全だと繰り返してきたが、福島に暮らしていて安心が確保されているとは思えない。行政に対しては安心で安全に暮らせる体制を整えてもらいたい。これから必要なのは福島で生活する人や、日本そして世界の人が安全にくらしていけるようにすることです。放射線の防護ネットワークをいち早く作ることが必要でしょう。子どもたちの未来を守っていきたいです。

中手聖一（「福島の子どもの未来を守る会」）

「これ以上原発を作らせない」

私の体験したことから伝えられるのは、原発はエネルギー問題ではないということです。脱原発とはもう二度とこのような事故を起こさない社会のことだと感じます。この1年必死に子どもたちを守ろうと、食べ物の測定や防護のことを伝えてきました。でもひとたび事故が起こればどうしようもないのです。そのことがつくづくわかりました。決して原発をこれ以上作らせない、それが私のただひとつの願いです。

8 Interview

熊野英介
Eisuke Kumano

アミタ株式会社代表取締役社長
1956年兵庫県生まれ。1979年4月スミエイト興産株式会社（現アミタ株式会社）入社。1993年11月代表取締役社長に就任。「持続可能社会の実現」を掲げ、他社に先駆け再資源化事業を開始。2005年、持続可能経済研究所を設立し、2007年には自然放牧「森林ノ牧場」を開設。総合環境ソリューション企業として事業領域を拡大している。現在は、グローバル・コンパクト・ボード・ジャパンのボードメンバー、東北大学非常勤講師を務め、公益財団法人信頼資本財団理事長、特定非営利活動法人地球デザインスクール理事長を兼任。著書「思考するカンパニー」（幻冬舎）、「自然産業の世紀」（創森社・アミタ持続可能経済研究所共著）

資本主義から共感主義へ。 Japan Voice

—— The Future We Want

社会は「豊かさ」ではなく「裕福」を追求しすぎました。日本には豊かな森がありました。しかし、産業になる杉を植えるために紅葉や山桜を失いました。そこに緑はあっても、それは豊かな森ではなくなりました。人間が、社会が自然から離れたんです。価値観をもう一度「豊かさ」に戻す必要を感じます。

—— 3.11を通して

アミタグループは未来のリスクを低減すると決めた会社です。震災直後の3月28日が株主総会でそこで定款変更を行いました。自然資本と人間関係資本の増加に関する事業のみを行うという定款変更でした。

3.11で感じたのは「近代の劣化」です。国民国家という概念の中で民主主義と資本主義が動き豊かな社会を作ってきた。これが3.11で崩れました。世界でも有数の国である日本が個人の生命や財産を守れなかった。生き残

8

Interview

熊野英介

Eisuke Kumano

った人も被災地で、人間の尊厳が守られなかった。電気もない、食事もない、暖も取れない。体育館で何ヶ月も生活しないといけない……近代が作ってきた豊かだと思っていたシステムが動かなかった。新しい資本が必要だと気がつきました。その資本を基礎にこれから人類は繁栄していかないといけない。その新しい資本が自然資本と人間関係資本なのです。私は今まで「環境リスク」を減らすということを本業としてやってきました。次は「未来のリスク」をなくすことが必要になってきたのです。

信頼関係で成り立っていた中世が、契約をすることで安心をする近代に変化しました。でも近代の文化はもうダメだとわかったのです。では、どうするのか? 人間は社会性が進化してきました。本能として共感をすることができる。これは脳科学的にも証明されています。これをもとに社会を作って行く。これを「共感主義」と呼んでいます。自分が自分らしくあるために豊かな人間関係が必要なんだ、そういう共感を持つ。自分の人生はまわりに共感を持ってもらえるくらいの個性を持っているか? こういう考えが未来の姿としてあると思います。

── いま最優先でやらなければいけないこと

企業は、財務に基づいた事業を変えなければいけない。オペレーターとしか存在していない。価値を作るということをもう一度思い出さなければいけない。新しい価値を作ること、新しい市場を作って行くことが企業の役割だと思います。私は具体的には会社という概念をイノベーションしようとしています。社会保障を国がしにくくなっているなら、会社というプラットフォームでセーフティーネットを作りたい。会社は英語で「company」と言います。これは会社という意味のほかに「仲間」という意味もあります。会社ではなく仲間を作りたい。私は一人では生きて行けないんだ、という感覚を会社の中で作ろうとしています。そこから生まれてくる豊かさをビジネスとして、具体的商品として展開したいですね。

Interview 9

Voices of HOPE

越尾さくら
Sakura Koshio

福島県会津若松出身のシンガー。
ラジオDJやモデルもこなす傍ら老人介護にも携わる。
東日本大震災後、福島県復興応援プロジェクトを立上げ、音楽を通し福島を応援しようとチャリティーイベントの開催や県内の専門学校生等と協力し震災遺児・孤児の支援等を行ったりしている。
被災地代表アーティストとして各地の復興イベントへの出演多数。
ふくしま駅伝テーマソングなどCMやTVタイアップ多数。

Interview 9

Voices of HOPE

越尾さくら
Sakura Koshio

私は福島出身の歌手です。福島は、放射能被害や汚染があります。ちゃんと福島に住めるようになってほしい。福島を離れた人がまた笑顔で戻ってこられるようになってほしいです。現地で生活する人ががんばるのは大変です。実際に福島の人と話をしていて感じることですが、震災が起こってすぐは「なんとかしなくちゃ」とがんばっていた人が、がんばれなくなっています。そんな人たちに、歌を届けていきたいと活動しています。

震災の日は、東京にいました。歌手活動に加えて、普段は介護士の仕事をしています。その介護士の仕事をしている最中に、地震はやってきたのです。揺れがおさまり、福島の被害をメディアなどを通じて知り、当初は福島に住む家族のことが不安で、パニックになってしまったことを思い出します。

幸い家族は無事ですが、親戚や知り合い、周囲を見回すと私の生まれた福島というところには、避難を余儀なくされた人たち、津波の被害を受けた人たちがたくさんいます。そこで自分ができることは何か、と考えたら歌をうたうことしかありませんでした。

最初は、歌をうたっていいのかな? と悩みました。出身は福島ですが、震災が起こったときは東京にいて、今も福島には行きますが、そこに住んでいるわけではありません。そんな私が、やっていいのだろうか? 悩みました。周囲の人からの支えもあり、震災1週間後に自分のラジオ番組の中で福島に向けて歌をうたいました。泣いてしまって何度も録り直しになってしまいましたが……。

その後も、福島を想って「LUCKY ISLAND」という歌を創りました。福島の福はLUCKYという意味、島はISLANDだからという単純な理由ですが、私たちにとって幸福の島でありますようにとの願いを込めました。この曲を初めて現地で披露した際、受け入れてくれるのかもすごく不安でした。結果として、みなさん受け入れてくれたのはうれしかったです。

同時に「うつくしまやまねこ」という曲も作りました。これはネコの視線で福島を見つめている歌です。福島でこの曲のPVを録ろうとしたらボランティアで300人もの方が協力してくれたのです。だから、このPVに登場している方は、福島の方々です。社会人から学生、子どもたちまで。中には撮影のために、午後の授業をなしにして参加してくれた学校もありました。福島県内では多くのCDショップも応援してくれて、ブースの展開をしてくれました。

これだけ笑ってるんだぞ、元気だぞって伝えたい。

Japan Voice

9 Interview

Voices of HOPE

越尾さくら
Sakura Koshio

私自身、それほど有名ではなく、お金を使ってプロモーションをしたわけでもなく、ソーシャルメディアを活用したわけでもありません。リアルな人と人とのつながりが、PVの撮影に300人もの人を集め、CDショップの応援なども取り付けることになったんです。本当に口コミだけで拡がりました。どうしてそこまで多くの人が口コミをしてくれ、そして動いてくれたのか? 私は、そこにあるのは「想い」だけだと思っています。「福島はもうダメだ」という声が福島以外のところから多くあって……だから「福島はこれだけ元気だぞ! こんだけ笑ってるんだぞ!」という想いを世界に向けて伝えたかった。そのポジティヴな考え方と曲が、多くの人をポジティヴな行動へ向けたのではないかと思います。

私にとって、3.11で歌うことの意味が変わりました。音楽は商売道具ではないし、目の前の人を喜ばせることことができるものです。それが本当の歌の意味だと思います。福島のために歌いたい。そして、福島のために歌おうって決めたらみなさんが協力してくれました。歌の持つ本当の意味や力を知ることができました。

そして気づいたことは「原点を振り返る」ということ。文明が発展しても、大切なのはごはんが食べることができ、生きていくことだと思います。そして、大切なときに手を取り合い助け合うことだと思います。私のふるさと、福島の会津には「あいづっこ宣言」というものがあります。これは会津藩日新校の教えが基になっていて、その中にあるのが「ならぬことはならぬものです」。意味は「悪い誘惑に負けない強い心を持ちましょう。やりたくなくても、やらなくてはならないことはちゃんとやりましょう。自分勝手な行動はやめ、社会生活のルールをまもりましょう」ということなのですが、これが会津の人たちの心には根付いている。どの国、どんな人にも、こうした原点があると思います。原点に立ち返れば、自分の足下がふらついた時、立っていることができる。

― いま最優先でやるべきこと

いまの状態を「生の声」で発信していくことですね。想いを声に出すこと。飲み込むのではなく発信する。自分が落ち込んでいるときも自身が声を出すことで自分も人も励まされることってあると思うのです。

Return

本名孝至　伊弉諾神宮 宮司

日本人は変に救済を求めない民族だと思います。自分で、自分たちでなんとかしようと努力していく。また、起こってしまったことを受け入れようとする。宗教の歴史を見ればよくわかりますが、神道は道教、儒教、仏教、更には、キリスト教も受け入れてきました。これは世界から見ればきわめて珍しいことです。ですが、これが大きな災害や民族の存亡に関わるときに大きな威力を発揮するのだと思います。実際にそれを実感したのがマグニチュード7.3で最大震度7を記録した阪神・淡路大震災でした。

阪神・淡路大震災が起こったのは1995年1月17日でした。淡路島は震源地だったため、特に北部は甚大な被害を受けました。伊弉諾神宮も石造物はすべてダメで大鳥居が完全に崩壊しました。本当に目を覆うばかりの状態です。他の神社も同様に大きな被害を受けました。淡路島には本当にたくさんの神様がいるんですよ。神社をなくしてはいけない、そういう思いから私は伊弉諾神宮ではなく周囲の神社の修復に率先して協力していきました。伊弉諾神宮は日本最古の神社で日本の国土を造った伊弉諾、伊弉冉の大神をまつる神社です。私の代で修復できなくてもこの神社はなくならない、そういう思いがありました。神様には少し待ってもらうことになりましたが、正しい判断だったと思っています。

伊弉諾神宮の氏子さんたちは多くがこの周辺地区にいます。ことに郡家地区は被害が大きかった。住宅の半数以上が半壊もしくは全壊しました。そして死者は7名。この7名はすべて建物崩壊による即死でした。家屋の下で生き埋めになった人もたくさんいましたが、この人たちは救出されました。地域の人たちの手によって救出されたのです。神社のお祭りを思い出してもらうとわかると思いますが、お祭りを通して「この人はリーダーシップがあるな」とか「この人は力持ちだ」とかいろんなことがわかるんですね。そこに住む人たちと関係を築くことができる。これが非常時に役に立つ。「あの人ならこの時間はもう台所にいるはずだ」とか「あの人はみんなのことを知っているから教えてもらおう」「あそこのおじちゃんは力持ちだ」とか思いつけるんです。結果多くの人の命が救えたと思います。また、それがお祭りの原点なんじゃないかとも思います。ただ楽しむだけじゃなく、地域内の関係を作っていくのがお祭りではないでしょうか。自然に対抗して生きていこう、というのではありません。緊急の場合にはどういうコミュニティーの力を使ってみんなが安全に非難したりできるか、また生命や財産をどのように守っていくか、という心の教育が必要なんだと思いますね。

Return

池本啓二　野島断層保存館

「野島断層保存館」は阪神・淡路大震災で出現した野島断層をそのままの形で後世に伝えるために設立されました。こんな大きな災害があったんだということを忘れないために、また脅威を感じることで震災への備えの大切さを伝えていきたいと思っています。震災から17年が経ち、保存館に訪れる子どもたちは当時生まれていなかった子たちもたくさんいます。そういう知らない子たちにも「こんなことがあったんだ」と伝えられる。それは語り継ぐことも大切ですがやはり残せるものは残して実際に目で見てもらいたいと思っています。もちろん、「つらいことを思い出すので残さないでほしい」という声もありましたが当時の町長が「これは残すべきだ」と判断しました。

淡路島は神戸と比べて家屋の倒壊が激しかったんです。ですが、死者の割合は格段に低かった。それは都会ではなかったため、地域のコミュニティーがしっかりと形成されていたからでした。「消防団」という地域のボランティアチームがいます。私もメンバーに入っていますが、この地域にはそういう人たちが大勢います。昔は日本のどこにでもいたんですが、馴染みのない人たちもいるかもしれないですね。消防団はその名の通り地域で火事が起こったら消火活動を行います。それだけではなく地域の安全を守るために見回りをしたり、小学校の運動会に参加したりもするんですよ。そうやって地域の人と交流して行きます。この関係が如実に表れたのが阪神・淡路大震災でした。震災発生直後から、動ける人は消防団を中心に崩壊した家屋の下敷きになっている人を救出したんです。まずは、自分の安全を確保し、次に家族、そして近所の人を……自分たちの手で安全を確保していきました。これがどうしてか、というと説明はしにくくて、自然と地域に対する仲間意識の強さがあったんだと思います。どこに誰がいるかわからないと助けられません。でも、淡路島では「あのおばちゃんはあそこにいるはず」「この時間ならおばあちゃんはこの辺で寝てるにちがいない」そういうことを町のみんなが知っていたんです。

震災が起こってしまったときにどうするか、阪神・淡路大震災の経験をもとに備えることをの大切さを伝えていきたいと思っています。

Return

牧大介　株式会社西粟倉村 森の学校

岡山県にある西粟倉村は吉井川の源流域にある人口約1,600人の小さな村です。2004年に市町村合併を拒み、自立の道を選択しました。

日本全国で林業が衰退し、人の手の離れた人工林が荒れていくなか、西粟倉では約50年生にまで育った地域の森林の管理を諦めず、立派な百年の森林に育てて上質な田舎の実現を目指す「百年の森林構想」を2008年に掲げ、森林再生を起点に地域の未来を切り拓いていくことに挑戦しています。

(株)西粟倉 森の学校は、西粟倉の総合商社として、2009年にアミタグループが設立しました。西粟倉での取り組み自体は2004年からスタートしています。

「森は地域の宝もの」をコンセプトに、地域資産としての森林の価値を高めることで、持続可能な地域の実現を目指しています。

共有の森ファンドの仕組みづくりを行いました。山を持っているんだけれども、お金にならないからほったらかしにしているという人たちがたくさんいて、その人の個人財産なので放っておいてもその人の自由といえば自由なんですが、そういう山が増えることで結局地域の山が駄目になっていくので、山いらないしお金にならないしどうでもいいというんだったら、預けてくれ、しっかり管理しますから、という仕組みです。田舎では役場の信頼があるので、役場が中心となって役場に森を10年間預けてくださいという仕組みをまず作り、役場が10年間責任を負いますということで預かった山の経営していくために役場の中に百年の森事業特別会計という特別会計をもち、そこで収支を管理することになりました。田舎も自立して行かなければいけない。そのひとつのケースになっているのではないでしょうか。

Return

松島宏佑　一般社団法人ふらっとーほく

私は島根県の隠岐郡海士町にある株式会社巡の環でまちづくりを支援する仕事をしていたのですが、震災発生直後に地元である宮城県に戻りました。とにかく地元が心配でした。

震災直後はとにかくなんでもやりました。子どもたちのランドセルが足りないと言われると県外から探したり、コミュニティレストランを開こうとしている現地のおばさんの手伝いをしていました。お店のサポートから集客、現地で声を大事に、できることはなんでもやってみました。その後、被災地の温泉宿と提携して「ふらっとーほくー温泉宿に泊まってボランティアー」というツアーを企画しました。津波で沿岸部が壊滅状態になっているため、県外のボランティアが活動できないでいた、これを解消し、また被災地の中でも被害の少ない温泉宿に少しでもお客さんを呼ぶためです。述べ800人以上のボランティアの人を集めることができました。これをきっかけに、宮城県亘理群亘理町に、継続的に復興支援を行うため株式会社巡の環東北支部を設立しました。

現地で教員をしている人に話を聞くと、震災の後に子どもたちに「将来何がしたい?」と聞くと「復興のお手伝いがしたい」と答える子が少なくないそうなんです。子どもたちが自分の町のために何かしたい、と考えるのはすばらしいことだけど、何ができるのか? そこが私は復興への鍵だと思っています。いかにひとりでも多くの人が自立し、復興のプロセスに関わるか。これが復旧後の地域の未来にとって非常に大事だと思っています。この土台を構築していきたいです。

自分がなぜ、こういう活動をするか考えるのですが、ある意味今回の出来事は「チャンス」だと思っているんだと思います。今自分が傍観者になるか、プレイヤーとして動いて行くか……そう考えたときに動かないと後悔すると思ったんです。世の中には人生をかけるべきテーマがあると思うんです。いろいろな役割も人にはある。そして、私は東北出身者として、東北の未来へのプロセスを一緒に作っていきたいと思っています。

藤波心　ココロ&カナル

「原発がなくなったから経済がダメになるんじゃなくて、原発があるから経済がダメになるんじゃない??」

この問題って、人が生きるか死ぬかの、問題なんです。だから私がアイドルだから言わないっていうのは、おかしいと思うんです。ブログでこういった脱原発について記事を書いたときは、賛否両論ありました。全部で1万4千件ぐらいのコメントがつきました。私はいま15歳ですが小学校の時からアイドル活動をしているので、中にはファンの方からのコメントもあって、何か「アイドルの心ちゃんがそんなことを言うと思わなかった」、「水着着て、笑ってればいいのに、げんなりしたぜ」みたいなことも言われました。アイドルってやっぱり、おバカっぽいと言うか、ほんわりした感じのイメージがあるのはわかります。でもだからといって何も言わない、っていうのはおかしいんじゃないかなとは思います。

地球上にはすごいたくさんの動物がいますよ。動物たちって、弱肉強食の世界で生きています。でも私たち人類は、その中で唯一、弱い者を守る気持ちを持てた生き物だと思います。私たち人類っていうのは、その弱い者を守るために、法律とか、ルールとかを作ったと思います。だけど、今の日本や、世界は、何かグローバル化とか、勝ち組・負け組とか、経済発展とかを進化のようにとらえている気がします。これは一見進化に見えるけど、私の目から見ると、進化してるんじゃなくって、動物の弱肉強食の世界に戻っているように見えます。弱い者を守るというココロは、私たち人類に与えられた、ほんとに最後の希望だと思います。そういうことをたくさんの人にふんわりでもいいから、気づいて欲しいなあと思います。

（提供:TOKYO FM「WorldShift Radio」提供）